

北海道造形教育連盟



第37回

全道造形教育研究大会紋別大会

大会集録



とき 昭和62年7月28・29日

ところ 紋別市立紋別小学校
紋別幼稚園

オホーツク造形教育連盟

大会シンボルマーク



凍てついた流水を突き抜ける光は七色の虹だ。それは未来を創造する子どもたちの歓喜と力強さを彩る夢である。

その他紋別で今第37回全道造形教育研究大会が開かれている。緑の風と海原を渡ってくる潮香に全身を委ねて子どもたちは変幻に美を創りあげている。

開催地紋別を全道の子どもたちが心を一つにして、包み込む姿をデザインしました。

デザイン 訓子府町立訓子府中学校
佐藤敬司

目 次

| | |
|--------------------------------------|--------------------------------|
| 第37回北海道造形教育研究大会 「紋別大会」を終えて..... 1 | 第4分科会（小・中学年）.....19 |
| 大会スナップ..... 2 | 第5分科会（小）.....21 |
| 全道造形大会を終えて..... 4 | 第6分科会（小）.....24 |
| 昭和62年度主題 子どもの心をゆり動かす造形教育..... 5 | 第7分科会（中・高）.....27 |
| 紋別大会テーマ 表現の喜びにひたる子どもを育てる..... 7 | 記念講演 「オホーツク海の流水について」.....29 |
| 公開授業.....11 | 大会速報.....34 |
| 分科会一覧.....12 | 大会役員.....39 |
| 第1・第2分科会（幼・保）.....14 | 紋別小学校PTA協力役員.....42 |
| 第3分科会（小・低学年）.....17 | 編集後記 |

第37回

北海道造形教育研究大会「紋別大会」を終えて

オホーツク造形教育連盟委員長 豊 島 豊

その日、紋別地方はオホーツク高気圧に覆われて、すがすがしい朝を迎えました。天候不順が続いていましたから、雨降りと寒さを心配していたのです。関係者一同暗れやかな気持ちで、全道から駆けつけた仲間をお迎えできました。天の恵みとはあのことかのようなことを言うのでしょうか。

第1日目は、子どもたちの活動を見ていただくことから始まり、時間の経過とともに盛りあがりを見せていました。そして2日目の日程の最後に、次期大会場である滝川市へ道連盟旗を引き継いで大会の全日程を無事終了することができました。この地で初めての全道規模の教育研究大会であっただけに、感慨もひとしおのものがありませんでした。それもこれも皆さんのご援助とご指導のおかげによるものと心から感謝申し上げます。

紋別市は地図の上ではいかにも北辺に位置し、交通の便も必ずしも良好とはいえない小都市であります。このような地域での大会開催は、かなりの冒険であるとは思いましたが、道連盟の長い歴史の中で、このようなローカルでの大会もひとつの試みではないかと考えました。そして、何は無くとも皆さんをローカルのもつ温かさで包み込み、ありのままを見ていただく大会にしようと考えました。果してそのように受けとめていただけたかどうか、皆さんからの批評と私たちの反省の集約にまたなければなりません、それなりの成果をあげることができたと思います。

大会をふり返ってみますと、そこには一年ぶりに集まった仲間たちの交歓がありました。殊に、先輩である顧問の先生方の多数のご参加は感激の極みでした。また、全道からお願いした提言者、助言者、記録者の方々による有効適切な分科会の運営がありました。さらには、裏方に徹してこの大会を支えてくださった役員の方々やPTAの皆さんの尊い姿がありました。何にもまして、日頃の指導実践を公開する授業者の真摯な姿勢と、表現の喜びにひたる子どもたちの生き生きとした活動ぶりに、短い期間でしたが真剣に取り組み、積みあげてきた成果をみる思いがするなど、すべてが感誘の連続でした。まさに本大会は、集まった人たちみんなの手でつくりあげた大会であったことを実感しています。まことに有難いことだと思います。

なお、次期大会場である滝川市東小学校から大勢の先生方が参加していただき、その熱意と研究熱心なお姿には頭がさがる思いがいたしました。滝川大会が盛大に開催され成功を納められますよう心からお祈り申し上げます。

末尾になりましたが、この集録は分科会や講演の記録をお願いした方々により発行することができました。最後までご面倒をおかけしましたお詫びと、心からのお礼を申し上げます。

皆さん、本当にありがとうございました。

大会スナップ



いよいよ受けつけ開始



分科会で活発な討論（小学校分科会）



マンボのリズムに合わせ、楽しく演奏
アトラクション（紋小の子）



ワイ、たこをつた



大きなしゃぼん玉になあれ



みんなで大きなロボット作成中



「ストローぶえ」の迷演奏……がんばるぞ



立った 立った 大きな動物



「エーイ」「ヨイショ」「ウーン？」



「わぁ、人がいっぱいいる。ほく、がんばろう。」



よしわかった、きれいな色で



ウーン、ここはむずかしい。ヨイショ、ヨイショ



先生、ここが一番むずかしいんだ。



「こうやってのりをつけるのよ」
「ハイ……」



流水の旅人 (中2公開授業)



第37回

全道造形教育研究大会

紋別大会

1. 大会テーマ

子どもの心をゆり動かす造形教育

紋別テーマ

—表現の喜びにひたる子どもを育てる—

2. 日程

| | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------|------|-----------|----------------|----------------------|---------------|--------------|-------|------------|-------------|-------|-------|-------|-------|
| | 8:30 | 9:30 | 10:30 | 10:30 | 11:00 | 11:30 | 12:00 | 13:30 | 15:30 | 16:00 | 17:00 | 18:00 | 19:00 |
| 28日 火 (第1日目) | 受付 | 公開授業 班 | 司会・助言 提言打合せ | 開会式 オリエン テーション | 昼食 アトラクション | 分科会 授業・提言 | 移動 | 道都大学 見学 | 記念 パーティー | | | | |
| ※ 紋別小学校、紋別幼稚園 | | | | | | | | | | | | | |
| | 8:30 | 9:00 | 10:00 | 10:30 | 12:00 | 12:30 | | | | | | | |
| 29日 水 (第2日目) | 受付 | 分科会 提言 | 記念講演 | 閉会式 | | | | | | | | | |

— 大会事務局 —

〒094 紋別市花園町5丁目4-15

紋別市立紋別小学校

事務局長 狩野鉄男

TEL (01582-3-5135)

3. 記念講演

「オホーツク海の流水について」

北海道大学紙巻科学研究所付流水研究施設長
教授 青田昌秋氏

4. 主催

北海道造形教育連盟・オホーツク造形教育連盟

5. 後援

北海道教育委員会・紋別市・紋別市教育委員会・網走地方教育委員会協議会

北海道国立幼稚園教育研究会・社団法人北海道幼稚園協会

北海道社会福祉協議会保育協議会・北海道小学校長会・北海道中学校長会

北海道高等学校長協会・道都大学美術学部

6. 会期

昭和62年7月28日(火)・29日(水)

7. 会場

紋別市立紋別小学校 (紋別市花園町5丁目4-15)

全道造形大会を終えて

大会事務局長 狩野鉄男

第37回全道造形教育研究大会は7月28・29日、この地方独特の澄み切った青空、紺碧のオホーツク海を眺望する紋別小学校を主会場として盛会裡に終了し、次期大会場である滝川市へ豊島運営委員長の手を通して道連盟旗が引き継がれました。

本大会の開催をお引き受けしてから、短い準備期間ではございましたがテーマへの迫り方、授業での基本のおさえ、地域素材の掘り起こし、表現意欲の喚起等、考察を繰り返し、研究を進めて参りました。

公開授業を担当して下さった先生方。児童・生徒と共に雄武町や興部町からの引率等、大会成功の陰には、なみなみならぬご苦労があったものと思われまます。

ユニークな、しかも、子どもたちと共に学ぶ姿の美しい体験は、今後の造形教育の発展の上で、新風を添わせることと思われまます。

流水の街紋別市。爽やかで、潮の香りが漂う研究会。いくつかの課題は次期滝川大会で、練り上げてくださるよう期待して止みません。

本当に有難うございました。

子どもの心をゆり動かす造形教育

北海道造形教育連盟

人間が生きていく中で、形と色とは切り離すことのできない関係にあります。物の形を捕え、その形を写し出そうとする営みは、人間の成長に大きな影響を与えます。では形や色というものは何であるかを考えてみよう。今、ここに一本の野の草があるとしましょう。水を十分にすった細くすなりとした茎は、ところどころに節目があって、細いかぼそい茎全体を強靱に支えています。いく筋の葉脈をもった葉は、まるで航空写真でみる田圃のように見えてきます。

何枚かの花卉によって、おしべやめしべがまもられている花は、つつまじやかにほほえみかけてきます。大地から十分に水分を吸いとるために何本ものこまかなしっかりとした根を見ることがもできます。こうして草全体を見てわたくしたちは草を弁別します。草はその形や色ばかりでなく、その情況もふくんで子どもたちの前にあるのです。子どもたちは、そのひとつひとつの事実の中から、自己に対して反応し成長するのです。ある子は、花の中に宮殿や牧場や町をイメージするでしょう。またある子は根の中に生きる強さのようなものを感じとるでありましょうし、またある子は茎や葉の中から目に見えない空気の流れや、その動きの中からやさしさといったものを感じるでありましょう。このように、ものの姿、ものの形は、わたくしたちの心をゆり動かすのであります。ものをよく見ることの大切さは、このように「かたち」の中に含まれている動きを捕えることに他ならないのです。それは、ものの心を知るということな

のです。一本の草を弁別することにとどまらず草の心に接していく心によって、草の心に接することが「よく見る」ことなのです。造形教育は、そこまでの心の深まりを必要とする営みなのです。

一本の草ばかりでなく、わたしの先生を描くにあたっても同じことなのであります。先生を描くのは、そこに在るものとして描くのではなく先生の人格そのものを描くことなのです。それを本質を描くということなのです。そこにおられる先生を自分の力で呼びかけ、呼び込み、先生を子どもの、その時代の時間と共に永遠にしようとする営みなのです。それは先生をいつくしみ、先生と共に生きていく心なのです。それが造形教育で求める人間性なのです。

ものの形や色を描いたり、つくったりする造形活動は、自分の捕えたものを表現してみて、再検討することであります。このような活動は教師は励ましつづけ、子どもたちが己れの手法で表わし切れなくて失望したり、つまずいたりした時に、同じように苦しんでいる人がたくさんいることや、こんな工夫をしている作品があると、そのなやみやつまずきを離脱させる手だてをもって、子ども自身が自らの力で発展していくことを支えてやることです。このような時に、こうやりなさい・これはこうすればよいといったことを教えてはだめなようです。子どもが自分で工夫し、開拓していく姿勢がなくなると、またすぐ行き詰ってしまうからです。

子ども同志が仲間の工夫や努力に学びはげま

されるような教育を、わたしたちは「子どもの心がゆり動いた教育」と呼びたいのです。自分の心に聞いて描いたり、つくったりすることははげまし、支えることが子どもの心をしてゆり動くのであります。こういう作品をつくりなさいといったような強制をしたり、こういう技能をマスターしなさいと強制的にしたりして、子ども自身のものを育てない営みは、一時は目をひくような結果があっても、子どもの心はゆり動かないのです。それは子どもの心をゆさぶただけにすぎないのです。子どもたちがその一生を通して造形する活動を継続しつづけることは、人間の生活をより豊かにするものであることを自覚させてやる営みを研究実践の眼目にしたのは、その為なのです。

そこで、北海道の造形活動は次の点に力点をおいて進められるように努力したものです。そのひとつは、子どものとりまく生活（現実）とのかかわりを大事にして押しすすめたいということです。子どもが子どもなりに、その生活のどの部分に子どものエネルギーを発散させることが最も望ましいかを吟味し、それを積極的に教材化することです。既成の教材を見直し、色と形の修練の場を用意することです。そこで、ものやくらしを観察したり、理解したりして、イメージをよりひろげることです。それは、観察・認識・鑑賞・イメージの要素にたって、全教育活動の中ではぐくむように心がけることです。このことは単に造形活動が狭いものでなく学校づくりの中核になる仕事にしなくてはなりません。そのための共鳴と共感を学校の中につくりあげていきたいものです。

そのふたつは、造形物をつくることは、まさしく生産活動であります。ですからこれを利用する、つまり消費する必要があります。教育的生産物は教育活動の中に環流されて、子どもの

生活（精神をふくめたもの）を豊かにしていきたいものです。

みつつめは、造形するということの本質は、「教育する」「教育を求める」ことでなくてはなりません。子どもの内部にあるエネルギーを輝やかせることです。これは子どもの人格の陶冶でもあるのです。造形教育がひろい意味のガイダンスであることを自覚していくことであります。

この三つのことが、子どもの心をゆり動かし、人間として豊かになるのです。造形学習が造形の要素のための技術的な知識を身につけたとしても、それは「種子」にすぎません。「種子」だけでは生産はなされないのです。豊かな土壌があってはじめて生産の実をあげる訳ですから、子どもの生活をより深く、より柔かくしてやらなければなりません。子どもの心を開拓するには、教師が子どもへのたしかな、そして豊かな「ねうち」、即ち激見をもち、なにをどう教えていくかといったローグの見通しを持つことです。それは、子どもが「どう学習するか」といった子ども自身の生活の発見を重ねて「何を学んでいくか」ということを深めていくプログラムをつくりあげていくことです。

子どもの心をゆり動かす造形教育の志向は、第2の本連盟の指導の構築の仕事であるといえます。今日の教育課題でもあり、また教育の究極の課題でもある個性の尊重という課題に向けて「人間が人間として人間となる。」ことをめざして、子どもたちをたえず励まし、支え、発展させ、子ども自身のもの、その子の個性的な生き方のにじみ出たもの、つまり、その子自身の表現を援助する仕事を北海道造形教育の基底におきたいのです。

<文責 金井 秀男>

表現の喜びにひたる子どもを育てる

オホーツク造形教育連盟

1. はじめに

臨教審答申の中に、来るべき21世紀を担う子どもを育成していくための教育の目標として、「ひろい心、すこやかな体、ゆたかな創造力」を第一に挙げ、健全な精神を宿した健全な身体の特長にしてはじめて、ゆたかな創造力を発揮することができることを指摘している。

オホーツク造形教育連盟では、今まで子どもたち一人一人が「創り出す心」「創り出す喜び」を感じ、自分の気持ちを視覚的に表現し続けることができる態度を将来に向かって持ち続けることを期待し取り組んできた。

私たちは、表現や鑑賞といった活動を通して、ものの本質を正しく見抜くことや、自分の意志を思うように表現することができる力を養い、その上で新しいものを発見したり、創り出していく創造力を高める造形教育を求めて行かねばならない。

特に、人間の心と健康の大切さを認識し、子どもの心身ともに健全な均衡のとれた発達に最大限の努力を払うことが求められている。

今日の子どもの実態をみると、「物があって心がない」「自分があって他人がない」など子どもの生活の中から、自己の手や体を使って直接体験することが失われてきている。

いわゆる非人間化が進み、手づくりの良さを見失いつつあるのが現状である。したがって、「表現の喜びにひたる子どもを育てる」ことは、最も今日的な課題の一つである。

2. テーマについて

「好きこそものの上手」といわれるとおり、「何ごととも好きだと、それを熱心にやるから上達するのだ」という金言は、芸術教科において欠くことのできない心情である。

子どもの造形活動においては、表現の喜びにひたることによって、描いたり、造ったりするイメージが湧き、五感をフルに働かせて自らの意志と判断によって主体的にものを見たり、触ったり、経験したりする。

また、からだ全体をつかって心に感じたことを視覚的な手段で表現しようとする意欲や態度が培われるのではないだろうか。

「表現の喜びにひたる」とは、主体性を育てることである。他から働きかけられるだけの客体ではなく、自分から他に積極的に働きかけるのが主体である。

ここに私たちは、人間性教育＝個性尊重の教育＝主体性を育てる教育＝創造性を育てる教育という図式で「表現の喜びにひたる子ども」を育てて「子どもの心をゆり動かす造形教育」を進めたい。

3. 研究の手がかり

紋別大会では、子どもの現状の中から造形教育を進めるに当たって、私たちは、カウンセリング・マインドに立った指導の手順、方法を工夫し、授業実践を通して解明していきたい。

子どもたちの学習態度でよく見かけるのは

「ただ描けばいい、造ればいい」という主体性のない子ども、「どうせ下手だからだめなんだ」という子どもの中には、形を正確にじっくり見ることができない、描き方や彩色の仕事が雑である、色の使用が概念的である。作品の出来上がりが遅い、集中して取り組めない等、ただなんとなく描く、造る子どもが多い。

これらの課題を解決するためには、まず第一に、子どもたちの日常生活の中で「より豊かな心情と環境を醸成する」ことが先決である。第二に、私たち教師は「何故子どもに絵を描かせたり、ものをつくらせるのか」を認識する必要がある。

第三に、今までは「子どもにどう良い絵を描かせたり、ものをつくらせるか」という技術面にこだわり過ぎていたように思われる。

これからは、「心のやさしさを育てる」ことを表現活動の目あてにすることが大切である。ややもすると、知育偏重になりがちな現在、言葉による自己表現が乏しい授業の中で技能教科は、言葉以外の手段で自己表現ができる貴重な機会であり、教師は、子どもの心の読みとりとそのフォローに心がけたいものである。その一例をあげると、

- (1) 子どもを公平に扱い、子どものちょっとしたつぶやきやビントの外れた考えも一つの考え方として、大切に取り上げる。
- (2) 子どもの発言をさえぎらず、「うんうん」「なるほど」「そうか」などと傾聴する受容的姿勢が必要である。
- (3) 子どもに考える間を与え、教師の待つゆとりが必要である。
- (4) 子どもの表現を生かしながら整理し、考え方や感情を的確に確かめてやる。特に情緒的表現を大切に、子どもの「こころ」

を育ててやる。

- (5) 個人の考え方や感じ方が集団に伝わり、相互理解のもとに、子どもが存在感を感じるように援助してやる。
- (6) ほめたり、激励したりして子どもに自信と勇気を与えてやる。
- (7) 「正直なところ、先生も難しいんだ」のように、教師のありのままの姿をさらけ出し「だれもが困ったときは、困った態度を見せるのが自然である」という安心感を与えてやる。
- (8) 自信のない子のサインも注意深くキャッチし「君、何か言いたそうだね」のようによく引き出してやる。

このようなカウンセリング・マインドは教育相談という特別な分野のものではなく、教育の基本姿勢として、全教師が持たなければならないものであり、授業の中にこそ生かさなければならない。

4. 教えることと育てること（表現過程）

(1) 想像の系（育てるところ）

絵や工作という造形活動は「答えは一つではない世界」であるために、一人一人の子どもの個性に応じた考え方、感じ方、表し方が自由に表現できる特色もっている。

図工科の学習における子どもの表現過程は、裏を返せば、教師の指導過程の反映でもある。すべての造形活動は、色と形のイメージが浮かばないことには、表現の出発にならない。人はいろいろな先行経験を素材として、新しいイメージを作ったり、表現化していくのである。

人はイメージによって行動するから、描くことや作ることへの行動は、ここで決まることになる。教師側からみれば、このイ

イメージの浮かべさせ方が指導のポイントになる。

(2) 技術の系（教えられるところ）

イメージが明快に浮かんでも、そのままでは絵となり工作とはならない。絵ならば画用紙とクレヨンや絵の具など画材の使用という技能面と、絵という様式の約束ごとを学ばなければ、絵として表現することにならない。この技術の系は、いわゆる教えることのできる場所である。

同じように、工作では、材料が整えば、造形活動が始まるというわけにいかない。それらの材料をどう処理するかという技術的なことを教えたりやってみることでわからせたり、何回もやり直して確かめること（造形トレーニング）によって技術的態度を育てていくことが大切である。

教えられるものには、次のような事項が考えられる。造形原理・造形要素の基本・ものの見方・感じ方の基本・材料の一般的な性質・道具の扱い方の基本・制作手順の例等、認識と技能構成にかかわる内容。

(3) 伝達の系（心のよみとり）

子どもの絵は「あなたへのメッセージである」とか「心の伝達である」といわれるように、絵その他の造形表現は、表現であると同時に伝達を含んでいて、表現しながら自分にいきかせる自己伝達と、親や教師に伝えようとする他伝達とがあって、伝達が成立すれば快、不成立は不快である。

子どもが、絵を見せにくるとき、その絵に表された意味や感動の度合いをよく読みとってやるのが大切である。

5. 子どもの「発見・感動」をいかに深めるか

(1) 教師自身のみずみずしい感覚を保つこと

子どもの驚きや発見を大切にするためには、題材との出会いが、感動的なものになっていなければならない。五感を働かせ体を通して題材に出会ったとき「すごい、きれい、作ってみたい、描いてみたい」等の感動が生まれる。

子どもたちの発達段階や興味・関心をおさえ題材の可否を決めるのが教師自身である以上、発想を豊かに子どもに働きかける教師自身のみずみずしい感覚を失ってはならない。子どもの経験や体験・夢を語らせ振り返らせてそれを投げかえしたり、みんなと語り合うとき教師の話すことばが感動的であればある程、子どもは生き生きしてくる。

(2) 題材の研究を進め、試作すること

特に立体工作の場合、教師が試作に要した時間の3倍を子どもの制作時間とみる。教師自身、自ら制作してみて制作上の要点が確認でき、技法上の問題点をおさえ、指導への自信をもって授業へ臨むことが大切である。そうすることが、結果的にねらいにそった参考作品を見せることもできる。

挿画にしても、たとえ自らが実際に上手に描くことができなくても、遠近・明暗をどう表現していくか、その要点をおさえることができる。技術・技法は、自分のえがいたイメージ表現のために必要なものである。教師の試作は、作品の良し悪しに関係なく子どもの表現意欲を高めるものである。

(3) 地域素材を掘り起こし、身近な題材として与えること

題材の取り上げ方についても発達段階に応じた子どもの興味や関心をひくものになっているかどうか、身近かで興味をひき出し地域の素材をどう生かしていくか、地域素材の開発・発見については、造形絵地図

などを作って、どこに写生の好適地があり、手に入り易い素材があるか記入しておくことも一つの工夫である。

て培われる。私たちは、今まで実施されている6段階の指導を次のような子ども主体の4段階に集約することができる。

6. 題材の指導段階の見直し

子どもが課題や問題を的確に受け止め、自己の能力を最大限に発揮して追求したり、友だちの意見や資料を使って解決のために努力しようとする「能力・態度」の育成は、学年学級経営を基盤とした日常の継続指導によっ

| | | | |
|------------|---|-------------|----|
| 1) 事前指導の段階 | } | ①事前・準備・発想の | 段階 |
| 2) 発想 | | 〃 | |
| 3) 構想 | } | ②構想・構成・計画の | 段階 |
| 4) 構成 | | 〃 | |
| 5) 表現 | | ③表現活動の段階 | |
| 6) 鑑賞 | | ④鑑賞・自己評価の段階 | |

7. 一単位時間の学習指導過程の工夫

| 過程 | 児童の活動 | 教師の働きかけ |
|----|---|--|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習は何だったかの話し合い ・つくりたい意欲は起きたか ・表現課題は何か ・表現の手順・方法はもうしたらいいか ・どんな準備をしたらいいか ・頭の中の発想を具体的にどうするか ・構成・色のつくり方などはっきりするか ・何をどのようにどんな順序でつくるか | <ul style="list-style-type: none"> ・学習意欲の喚起 ・学習のねらいへの動機づけ ・本時の学習の資料提示 ・表現課題の提示と焦点化 ・表現方法・技法・手順の明確な提示（資料・作品） ・一斉・グループ学習の工夫 ・材料・用具の使い方の確認 |
| 展開 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分の想に従って、よく工夫して製作する ・自己評価しながら製作する ・ねばり強く製作する。 ・友だちの作品のよいところを取り入れたりしながら集中して製作する ・相互評価しながら製作する | <ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の工夫 ・形成度の的確な把握 ・指導の個別化 ・表現のつまずきに対する指導 ・意欲を継続させる発問の工夫 ・自己評価・相互評価の重視 |
| 整理 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分や友だちの作品のよいところ、直したいところを発表する ・今日の製作はよかったか反省をする ・どのように表現すればよかったか ・次の図工の学習は何か、どんな事を考えておくか ・しっかり後始末をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・評価基準に照らした作品を選び話し合わせる ・学習のしかたについて反省 ・表現の仕方・方法について ・次時の予告・想・準備など ・後始末の確認をする |

<文責 西原 進>

公 開 授 業

| 校 種 | 領 域 | 題 材 | 授 業 者 | 学 校 |
|------------------|------------|----------------------------------|--------------------|------------------------|
| 保 育 所 | 絵 画 工 作 | 魚 つ り を た の し む | 高 野 友 子 奥 村 由 美 | 紋 別 保 育 所 |
| 幼 稚 園 | 絵 画 | え の ぐ で し ゃ ぼ ん だ ま つ くり | 折 目 昌 子 | 紋 別 幼 稚 園 |
| ” | ” | ” | 坂 下 悦 子 | ” |
| ” | ” | ” | 門 井 彰 子 | ” |
| 小 学 校 1 年 | 造 形 遊 び | つ く っ て あ そ ぼ う | 木 山 順 子 | 紋 別 小 学 校 |
| 小 学 校 2 年 | 紙 工 作 | な か よ し の 動 物 | 小 蔵 春 雄 | 潮 見 小 学 校 |
| ” 2 年 | デ ザ イン 工 作 | ス ト ロ ー 笛 | 佐 々 木 雅 栄 | 紋 別 小 学 校 |
| ” 3 年 | 彫 塑 | 動 い て い る 人 | 小 野 寺 宏 二 | 紋 別 小 学 校 |
| ” 4 年 | デ ザ イン 工 作 | 歌 う 人 形 | 渡 辺 智 枝 | 紋 別 小 学 校 |
| ” 4 年 | 絵 画 | お 話 の 絵 | 政 二 美 紗 | 沙 留 小 学 校 |
| ” 5 年 | 版 画 | 物 語 の 版 画 | 井 上 忠 明 | 紋 別 小 学 校 |
| ” 6 年 | 絵 画 | 紋 別 の 町 | 山 田 明 弘 | 紋 別 小 学 校 |
| 中 学 校 2 年 | デ ザ イン | オ ホ ー ツ ク の 旅 人 | 金 子 定 雄 | 雄 武 中 学 校 |
| 小 学 校 特 殊 学 級 | 工 作 | ダ ン ボ ー ル で 遊 ぼ う (合 同 学 習) | 坂 本 勝 雄 阿 部 輝 夫 | 潮 見 小 学 校 紋 別 小 学 校 |

第37回 全道造形教育研究大会・紋別大会 分科会一覧

| 分科会 | | 選 択 テ ー マ | 選択領域 |
|-----|----------------|--|--------------------|
| 1 | 保 育 園 | 1. 子供の発達にそくして、生き生きと活動させるには…。 2. 子供の心を満足させる活動をさせるには……。 3. 夢中になって挑み、創る楽しさを味あわせるには……。 4. 身体ごと楽しむまで、色や形の美しさを感じるように。 | 全 領 域 |
| 2 | 幼 稚 園 | | |
| 3 | 小学校低学年 1・2年 | 1. 経験や体験と結びついた豊かな表現を……。 2. 思いをこめて楽しく作るためには……。 | 造形遊び 描 画 工 作 |
| 4 | 小学校中学年 3・4年 | 1. 子供が躍動する創造活動を生み出すために……。 2. 目当てをもって楽しく作り出すためには……。 | 彫 塑 工 作 |
| 5 | 小学校高学年 5・6年 | 1. 一人一人が思いをこめてつくり出す活動……。 2. 心のかおる絵画表現を生み出すために……。 | 描 画 版 画 |
| 6 | 小学校総合 1～6年 | 1. 地域性を生かした造形教育の在り方……。 2. 主体的に活動する子供をつくり出すために……。 3. 北国の厳しさに耐える心を表すために……。 | 全 領 域 |
| 7 | 中 学 校 | 1. 自己を見つめ、感動あふれる豊かな表現……。 2. ねらいを明確にした表現活動を……。 | 描 画 彫 塑 工 芸 |
| 8 | 中学校総合 | 1. 地域性を生かした造形教育の在り方……。 2. 心をとらえた造形活動を……。 | 全 領 域 |
| 9 | 高等 学 校 | 1. 主題を追求するための……。 2. 内面性を表現するための……。 | 全 領 域 |

| 司 会 | 氏 名 学校名 | 提 言 | 氏 名 学校名 | 助 言 | 氏 名 学校名 | 記 録 | 氏 名 学校名 |
|-----|---------------|--------------------|------------|----------------------|---------------|-----------------|------------|
| | 島 村 衛 | 吉 野 惠理子 東 藻 琴 幼 | | 吉 田 義 晴 | | 大 西 道 代 | |
| | 紋別市紋別保育 | | | 東藻琴村東藻琴幼 | | 紋 別 大 谷 幼 | |
| | 久須美 進 策 | | | 菅 原 隆 治 | | 加 藤 典 子 | |
| | 紋別市渚滑小 | | | 北見市北光幼 | | 紋 別 大 谷 幼 | |
| | 本 宮 豊 | 成 瀬 登 | | 渡 辺 貞 之 | | 森 沢 真 佐 子 | |
| | 上士幌町北居辺小 | 帯 広 市 大 空 小 | | 深 川 市 菊 水 小 | | 網 走 市 網 走 小 | |
| | 原 弘 | 小 泉 陽 明 | | 神 田 耕 治 | | 増 山 真 由 美 | |
| | 滝上町滝下小 | 別 海 町 中 春 別 小 | | 旭 川 市 忠 和 小 | | 北 見 高 栄 小 | |
| | 本 間 義 視 | 大 石 迪 也 | | 今 井 龍 男 | | 亀 浦 忠 夫 | |
| | 帯 広 市 啓 北 小 | 清 水 町 御 影 小 | | 紋 別 市 南 丘 小 | | 小 清 水 中 斗 美 小 | |
| | 清 水 克 美 | 猪 谷 憲 博 | | 阿 部 将 | | 竹 中 博 人 | |
| | 別 海 町 光 進 小 | 滝 上 町 滝 上 小 | | 釧 路 市 東 中 | | 興 部 町 秋 里 小 | |
| | 竹 内 洋 嗣 | 原 完 | | 横 田 勇 吉 | | 花 田 光 正 | |
| | 遠 軽 町 南 中 学 校 | 旭 川 市 旭 川 中 | | 斜 里 町 越 川 小 | | 小 清 水 町 小 清 水 中 | |
| | 田 中 浩 | 佐 藤 源 嗣 | | 小 室 吏 | | 絹 笠 二 三 男 | |
| | 釧 路 市 緑 陵 中 | 名 寄 市 名 寄 東 中 | | 帯 広 市 清 川 中 | | 網 走 市 第 三 中 | |
| | 土 岐 楨 次 | 話 題 提 供 道 都 大 学 | | 道 都 大 学 美 術 科 教 授 | | 岡 崎 公 輔 | |
| | 札 幌 北 校 | | | | 北 見 小 泉 中 学 校 | | |

第1、第2分科会（保育所・幼稚園）

テーマ 子供の心を満足させる活動をさせるには。

1. 公開授業

題材名 「魚つりを楽しむ（保育所）」

(1) 指導者より

- ・紋別という漁業の町に育ちながらも、魚の生態に今まで関心を持つ機会が少なかった。
- ・そこで、6月当初より市場見学や、色々な図鑑や絵本を見たりする。
- ・7月に入り、今回のクラス作りを始め、プレイルームに海の飾りを作って貼り、気持ちを高める。
- ・当日小学校に来て、積木で池づくりをして自分達の作ったものを持ってきて環境を設定した為、普段と様子は変わらなかった。
- ・指導者は、あまり助言せず、子供達のイメージにまかせるようにした。
- ・材料不足、経験不足で戸惑う子もいたが、助言することにより、活動していた。
- ・魚つりの中で、材料によっては、上手く釣れないものもあった。
- ・自分の作った魚に執着せず、他の魚もみて楽しむ姿に驚いた。

(2) 話し合い事項

- ① 市場へ行った時見たものは、本日の保育をして行く中で、続いていくのか。
- ・漁業の町であるのに水族館などなく、スーパーに行けば魚はパック詰めになっている。市場見学で、パック詰めではないそのままの姿を見てからは、魚

の名前を覚えたり、興味や関心を持つようになった。これからも、観察画を描いたりなどをして、保育の中につなげていきたい。

② たて割り保育に対する配慮。

- ・生活面、遊び中心の時は、異年齢保育、絵画製作や保育中心の時は、同年齢保育をしている。今は、兄弟、姉妹が少ない為、異年齢で学ぶものは大きい。異年齢で絵画を進める場合、大変困難である。

題材名 「えのぐでしゃぼんだまづくり」

（幼稚園）

(1) 指導者より

- ・絵画製作は、昨年より専門の先生と一緒に教師も学びながら指導している。
- ・今年は、4月から7回指導している。
 - ・色の濁りさ～線描の指導
 - ・毒入りリング～補色混合の指導
 - ・洗濯機の中～たらし込みの指導
 - ・色のちらしずし～重色の指導
 - ・スタンプング～版遊びの指導
 - ・フィンガーペインティング～色遊び～めたくり遊びの指導
- ・シャボン玉遊び
- ・本日の導入として、2日前から水遊び、シャボン玉作りをしてイメージをふくらめます。
- ・当日、朝早く登園して、水遊びをする。
- ・三原色(赤、青、黄)を使い、シャボン玉遊びの話し合い、イメージを思い浮かべ行う。
- ・3才児は先生と一緒に、4・5才児は自分達で楽しんで行っていた。
- ・時間が少なく、ぬりせばめをする時に説

明不足だった為、赤、青、黄の3色を混ぜて塗るところを、絵の具が足りなくなり、次に用意する時に、黒を出して塗っている子がいた。

- ・本日までのことを基礎として、2学期からは、より一層膨らませ、お話の絵などにチャレンジして行きたい。

(2) 話し合い事項

① たて割り保育に対する配慮。

- ・造形遊びということで指導しているので、出来上がった作品より、その課程が大切である。異年齢でも良いのではないかと思う。

② たて割り保育の中で、カリキュラムは、どうしているのか。同じ事のくり返しにならないか。

- ・同じ題材でも、年齢が異なって行くにつれて感じる観点が違い、同じ事の繰り返しではない。

③ 造形活動の中で、教師とではなく、子供同志の中での遊びは、どういう展開をしているか。子供達同志の触れ合いがあった方が良いのではないか。

- ・本日の題材は、基礎段階であり、まず絵の具を好きになり、伸ばし方、筆の使い方から始め、これから発展させていく前段階である。この発展に伴い、子供達の触れ合いも多くなって行くのではないだろうか。

④ 本日の題材は、まだ年齢的に早いのではないか。いつも先生の設定したものではなく、子供達の思いも入れた方が良いのでは。

- ・カリキュラムはあるが、いつもそれにそっているわけではなく、子供から出てきた自由な発想を伸ばせるようにし

ている。実際子供達は、以前よりきれいな色で絵を描けるようになり、国用紙いっぱい大きく描き、楽しんでいる姿が見られる。

2. 提 言

(1) 提言テーマ

- ・子供の心を満足させる活動をさせるには。

(2) 内容・要旨

- ・子供にとっての造形活動

- ・友達とかかわってつくるという事

- ・実践例

- ・紙の立体動物づくりが、動物園ごっこになった例。

- ・おうちごっこがレストランごっこになり、異年齢にまで広がっていった例。

- ・幼児の発想で紙芝居作りが盛んになった例。

- ・まとめ

- ・豊かな造形活動は、豊かな日常生活から生れる。

- ・あそびの中で、幼児のかかわりは育つ。

- ・教師は、柔軟に個人や集団に対応し、持ちあじを生かしていく。

(3) 話し合い事項

あらかじめ先生側から準備はしているのか。準備はどうするのか。

あまり細かく準備していくと、どうして子供はこう動かないのかなど、保育者は準備で縛られてしまうし、子供も思うように行かないという例を見てきているので、指導案に囚われず、子供の気持ちを優先して、発想に任せていきたい。

教師である限り、子供に何か教えなければならぬという使命感に囚われてしまう。

大きなシャボン玉、小さなシャボン玉を

作るという事は、幼稚園のフェンスの中で遊べという事と同じではないだろうか。

一方は計画的に、一方は子供の生活の中で興味あるもの。線描はするが、ぬる中で活動は難しい。計画する事によって発展していけるようなものを開発していく事の方が、大切ではないか。

幼児期には、情操教育が大事である。

造形にとって一番大切な事は、社会生活の中で、物を見て驚き、感動することなのではないだろうか。

ナイフを使う時に、怪我をしないように、などの指導が必要だが、技術指導ばかりではいけない。技術を教えるのは簡単だが、心を育てるのが基本だから大変なのではな

いか。

喜びにひたる、満足させる活動が大切。つくる心、気付かせる心が、幼児には大切ではないか。その中で先生は、お手伝いをしてあげる指導が大切ではないか。

活動している課程の中で、子供達にはとっても素晴らしいことがある。

準備、計画は、持たなければならないが、子供の中から出てきたものが大切ではないだろうか。

造形教育とは、心を育てる大事な要素ではないか。

参加者ひとりひとり、これらの数々の意見をもとに、これからの課題としておく。

第3分科会（小学校 低学年部会）

- テーマ 1. 経験や体験と結びついた豊かな表現を……………。
2. 思いをこめて楽しく作るためには……………。

1. 公開授業

題材名 [つくって あそぼう]

(1) 指導者より

- ・事前指導として、1時間ダンボールで遊ばせた。
- ・グループで何を作るか相談させる。
- ・展開の段階で順序をおって作らないグループがあった。
- ・完成しないグループがあったので、ゲームができなかった。
- ・ねらいの「協力し合い、楽しく学習する」は達成したと思う。

題材名 [ストローふえ]

(1) 指導者より

- ・発想の段階で、大へん興味を示した。
- ・授業は、いつも以上にぎやかであった。
- ・作品が完成しない子どもがいたので、整理の段階を5分間にした。
- ・アイデアスケッチをもとにした模様や飾りつけができていた。

(2) 話し合い事項

- ① 一年生の素材としてダンボールを使用するのは、抵抗はないだろうか。
- ・箱で遊ぶのみなので抵抗はない。カッターナイフ等は、児童には使用させない。ガムテープを使用した。
 - ・切ったり折ったりしないので、そのま

まの形を利用するのであればよいのではないか。

- ② アイディアスケッチブックは、低学年に必要かどうか。

- ・作業を早く進めるために使用した。
- ・イメージ化したものを、紙に描いてみる発想の段階を継続させていくためと、次の作業に導きやすい意図で使用した。
- ・低学年では、話し合いをするだけで、イメージがふくらむと思うし、アイデアスケッチに描くことには、無理があるのではないだろうか。
- ・低学年では、材料をさわったり、話し合いをしている中でイメージ化されるので、無理した形では、アイデアスケッチは必要はない。
- ・製作の順序、材料が計画的にできるので、低学年においても題材によっては、アイデアスケッチを使用してもよいと思う。
- ・低学年では、子どもがイメージ化したものを紙に描くことは難しいので、発達段階をおさえながら、子どもと十分な話し合いした上で、アイデアスケッチを取り入れるのならよい。

- ③ 友だちの模倣をしたがる子どもの指導をどうしたらよいか。

- ・よいものは、まねをさせてもかまわないと思う。
- ・描けない子どもには、友だちのよいところをまねて描かせてもよいと思う。
- ・まねは、高度な技術である。
- ・まねを否定する必要はないと思う。
- ・まねをしながらでも、その中に一つの工夫を入れさせていく指導が必要である。

2. 提言

(1) 提言テーマ

- ・経験や体験と結びついた豊かな表現を…。
- ・思いを込めて楽しく作るためには…。

(2) 内容、要旨

- ・子どもの絵の実態
女の子と男の子の絵のちがひ。
ファミコンのキャラクターやテレビマンガの影響が大きい。
絵のスケールが小じんまりしてきた傾向がある。
子どもをとりまく社会環境や地域性について。
- ・一年生では、見て描くことはむずかしい学年であるが、見ることの大切さを思う。
- ・見たり、触ったり、匂いをかいだり、物とのふれ合いを大切に学習を教室にもちこみたい。
- ・一時間一時間の指導の積み重ね、そして事物を正しく捉える観察眼の育成こそ大切にならなければならない。
- ・伸び伸びと時間いっぱい、子どもたちの心を解放してやれるのは、矢張り図工科の時間ではないだろうか。

(3) 話し合い事項

- ・子どもの実態をきちんとつかむことが、一人一人を伸ばしていくことになる。
- ・学級経営と結びついた日常生活に取り組む姿勢が必要。
- ・一年生の心理状態を知ること。
- ・子どもに描かせる前に語りかけをしてやると発見の目も育っていく。

(4) 助言者より

- ・工作に取り組む姿勢が、話題提供となった。
- ・低学年では、工作を特に喜ぶ。

- ・工作は、自然や生活への働きかけができる、他人とのコミュニケーションができるので重要である。
- ・工作のおさえとして
 1. 子どもの生活と、どうかかわっているか。目的をあきらかにしなければならぬ。
 2. 技術、道具が自然と人間とどうかかわっているか。
 3. 先人達の英知や文化遺産をどう伝えていくか。
- ・工作と造形遊びのちがひを整理して、造形遊びに取り組んでほしい。
- ・絵を描く前後に詩をかかせると、子どもの心の動きがわかる。
- ・子どもにうまい絵を描かせるのではなく、どういう子どもに育てていくかが問題である。
- ・図工教育の発展のためにも、教師自身が資質を高めていくことが必要である。

第4分科会（小学校 中学年）

- テーマ 1. 子供が躍動する創造活動を
生み出すために……。
2. 目当てを持って楽しく作り
出すためには……。

1. 公開授業

題材名 【動いている人】 彫塑

(1) 指導者より

- ・1、2年で油粘土を使用してきたので、3年になって初めて挑戦、土管工場から材料を分けてもらい、一人2.5kgの量で試みた。
- ・事前指導として、粘土クローネーをし、立つ人が作れるかどうかやってみた。
- ・木片等があれば補強できてもっと良かったのではないかな。

(2) 話し合い事項

- ・2.5kgの粘土は、大胆さが表現でき、技法としても、ひねり出し、押しつぶしは良い方法と考える。
 - ・初めての土粘土であるので細かい技法について言わず、作り方はどうあれ、子供達が一生懸命取り組んでいた。
 - ・四角いかたまりから、創造しねったりひねり出したりする方法は、安定感もあり表現がよく出ていた。
 - ・もう少し安定感（すわったり、かがんだり）を持たせて動作を限定した方が良かったのではないかな。
 - ・二体を用いて安定感を与えるものを取り上げてはどうか。
- 複数だけうまくまとまらないケースが多い。

- ・作品を残しておく喜びも与えてはどうか。焼いて保管はどうか。写真にして残している。
- ・量、硬さは子供に合わせることは重要であり、作品の出来ばえにも強く影響するものである。
- ・先生のやる気（持ち味）が出ていて、又地域にある素材を用い良かったのでは。
- ・彫塑活動は、作っている時が一番楽しい時であり頑張って「立たせるぞ」という思いが成功につながるのでは。
- ・創造性を培うためには、作られた素材よりも抵抗のある自然のもの（粘土、紙…）をぶつける事によって新たな発見、成長がある。
- ・系統性を重んじてどの学年で何を身につけさせるかが大切である。
- ・一時間の中でたくさん要求せず目標を明確にして進める事が大切である（ポイントをおさえた指導）。

題材名 【歌う人形】 工作

(1) 指導者より

- ・アイディアスケッチを描き本時にのぞんだ。初めて糊とセメダインを使い分けたが、あまりうまく使い分けられない。
- ・子供達は、楽しそうであったが本時の手や飾りをつける部分が、前時にできてしまった子が多かった。
- ・イメージを広げるためには、日頃の学級経営と深くつながると考える。

(2) 話し合い事項

- ・よく研究されて作られていた。子供達が目的達成のために一生懸命取り組み楽しそうに歌い満足げであった。
- ・園工は個人差がなく満足感を与える良

い教科ではないか。子供達が自分で作って遊べるものなので最後に作品を持って楽しく歌い、発達段階に応じて良かった。

- 基本的な用具の使い方（接着剤その他）は発達段階に応じてステップをふんで指導しなければならないものである。

2. 提言

テーマ「子供が躍動する創造活動を生み出すために」

～多くの材料経験させ用具技法を駆使して使うものを創造させる～

(1) 内容・要旨

- 最近物があふれていて、自分の身の周りの素材を使って道具・技法を使い創造する機会がないままになっているのではないだろうか。どの子供にも一人一人に応じた造形表現力を達成させ、活動意欲を高めるようにしなければならないと考える。

- 紙工作の基本的技能としては、切る・折る・つけるではないかと思う。これについては日常生活で生涯に渡って使うものである、しっかり練習し、慣れておかなければならない。

- 又、一人一人の子供の実態把握をし、画一化された教材にとらわれず、工夫をこらして子供の喜びを生み出す教材にする必要がある。

教師も教材研究をして、子供の期待にそう努力をしなければならない。

① 小箱をつくる。

- 基本の形の箱の作り方を理解させ、自分の作りたい楽しい形の使える箱を厚紙でつくる事ができるようにする。

② はりこの動物をつくる。

- びんを使って、はりこを作りその形を生かして好きな動物をつくる。
- 切断の仕方や接着剤の使い方を理解し、製作できる。

③ 作る喜びを得させる。

- 作品の出来、不出来ではなく、その努力、態度によって評価し、称賛すべきではなかろうか。たとえ作品が良くなくてもそこで得た喜びは次の作品作りに生き、創造活動をさかんにするものとする。

(2) 話し合い事項

- 箱の作り方で展開図は難しくはないか。紙のはしの直線を利用、図を描いていくのり代はあて紙をはる。

- 紙質に合わせた材料の使い方がだんだんとわかっていく様にする。接着剤は適量がわかる様に経験させる。

- 形の出来映えを見る為に机間巡視するのではなくやり方、付け方、工夫等を発見してやる。

- 芸能教科に対する親の目を見開かせるのも大切である。

- 作品を大切に作る心を育てる（裏打ち、ガラスの額ぶちに一度入れてやる…）。

• 教科の役割

- 子供達は、経験が少ないので作例を見せると良く理解できる。写真は素材、大きさがわかる。目標を植えつけることができる。教師が子供の作品の水準を知る事ができる。親が見る事によって啓蒙になる。学習の参考の手だてとして大いに使うべきである。

- 生活をする空間の中でどう安らぎを見つけていくかを育てていくためには、芸術は大切である。

- 工作や彫塑は色々な形で我々の中にある。それを見る目、手づくりをすることによって人間性を培い、自分のものにしていく学習が大切である。

第5分科会（小・物語の版画）

紋別の街

- テーマ
1. 一人一人が思いをこめてつくりだす活動
 2. 心のかおる絵画表現を生み出すために。

I. 公開授業

題材名 【物語のはん画（5年）】

(1) 指導者より

- 版画は初めてなので子供と一緒に勉強し多数の先生方に教えていただきたい。
- 経験したものを版画で表現してみようという中で物語を版画に表現させ、観点として根気力を養うためによいことではないかということで話を聞きながら、版画をすることになり、楽しく刀を使い彫ってみようということで実際にやってみたが、大変むづかしかった。
- 切れない刀を持ってきたので、よく注意がいき届かなかった。又、刀の使い方が大変むづかしいことに気がつき、その刀の使い方を指導して頂きたい。

題材名 【紋別の街（6年）】

(1) 指導者より

- それぞれ学年ごとにわかれて紋別の街を書く事にしていますが、今回6年生は紋別の街並みを描こうという事で風景に取り組みました。
- わく組みのフレームを使わせた。
- 用具については、白ボールを使わせましたが、その理由はよい特徴があり、ケシゴムなしで描かせた。

- 構図の取り方が一時間、混色の時間を三時間取った。尚、陰影のつけ方がうまくいかないし、写真を使わせた事がよくなかった。
- 非常に苦勞をしました。先生方のご指導をお願い致します。

(2) 話し合い事項

- ① 版画は彫りが主でしたが、特に切りだしをあまり使っていなかったが？
 - 中学年の頃は丸刀を使っていたようですが、切りだしを早く使わせるようにしておいた方がよかった。
- ② 本時のねらいが大きかったのではないか？特に刀の使い方について…
 - よくわかりません。
- ③ 草のまわりを彫っていましたね。輪郭を彫って、なぜ草の感じや、木の葉らしく彫らないのか？
 - 概念的な彫り方になってしまった。二回くらい彫らしてみたのですが。
- ④ 質感を出すために、白・黒の彫り方が光の影で彫らせたのか？
 - 白黒の彫り方で指導した。
- ⑤ 街並みの風景は光と影をとらえて描かせているなら版画も光と影で彫らせた方がよいのではないか。

(2) 助言者より

- 版画の経験が少なかったのではないか。年間どのくらいの題材を彫らせているか。
- 発達段階をよく見ながら指導していく事が大切ではないか。
- 重なり、遠近法は経験にあわせてやるとよい。

⑥ 分科会のテーマからみて、今日の版画はどの様なつながりがあるのか？、また、子供がやる気をおこさせるためにどの様な関わりがあるのか。

・どうしても機械的になり、その点テーマと関わりをもたせるためにも、イメージを持って彫っていくが、今日のテーマとつながりがあると思っていたが、中々むずかしい気がした。

⑦ 版を彫る時の音（サクサク）がしていたが、これが授業にあったのではないか。それがやる気をおこすもとはないか。

⑧ 版を彫る時、浅く浅くと言っていました。なにか意図があったのですか。

・一枚の板として、彫らせる子供の気持ちを考えながら、指導するとよかった。

⑨ 物語を版画にするには、むずかしい題材ではないか。もう少し単純化した方がよかった。

・焦点をしばってやらせる方がよいし、作業台がなくてもよいのではないか。

・台と版との関係は、台がない方がよい、切り出しの使い方が多くあってもよいのではないか。

・二、三時間程度、題材に入る前に彫刻刀の使い方を教えていた方がよかった。

◎子供の活動に対して教師が見つけ出してやるのが次の発展につながっているのではないか。

◎作業台を使わせるべきであるが、その指導過程に応じた作業のさせ方を考えていくべきである。

◎刀で絵を描いていくのが版画である。

○「紋別のまち」風景画について

① 題材内容にひそんでいるものとして、建物が駅前になったという事について何か意味があるのか？

・指導しやすいという点、自由にえらべるとテーマにそった、教師のねらい、子供一人一人がどうおさえているか、私の紋別をどう受けとめているかである。

・子供は既成の街を描きたがるので、もうすこし視点をかえて見る指導を？

② 助言者より

・色のつくり方、ぬり方に何かあったら、色でかくのではなく、色を置く感じで描かせるとよい。

・子供一人一人の個性を大切に、感動した場面をとらえさせた場所（街並み）を描かせることが大切である。

2. 提言

(1) 提言テーマ

・心のかおる絵画表現を生みだすために一郷土を知らせよう一

(2) 内容・要旨

・図工の学習をしたら、自然とか物の形の美しさを自ら気づき感じ取り、表現できる子どもになったといわれるような指導をしてみたいものだと思っている。そこで、3年、4年と2年間担任していた利点を生かして絵画学習のまとめとして「郷土の風景」を取り上げて子ども達が毎日生活している環境を対象に、その美しさを見直し、思い切り表現させてみようと思った。

・題材を指導する場合は、発想から構想段

階（導入）を大切に扱うことが、一人一人の子どもの気持ちを大切にすることであり、個性を認め、創造性を養うことであると思う。

(3) 話し合い事項

- 作品を中心に話し合いがおこなわれた。感動表現として素直に表現されている。しかも郷土を愛している感動の表現が課題のテーマにマッチしている。イメージがよく出ている。
- 主題にそった色を作り出している。
- 主題を追求する色作りがたりないが、構図の取り方や、指導の展開に感心した。
- 教師と子供達がよく心がかよっている。

- 画用紙と白ボールとの関係また、混色の仕方、いつまでも白ボールにこだわらないように、やはり厚での画用紙を使用させた方がよい。尚、概念くだきをするため、実物をよく観察させることが大切である。

(4) まとめとして

- 主題の選択に教師は気づき方が大切である。
- 主題にせまる表現があり、心と頭と手がしっかりと結びついている。
- 主題にせまる表現の工夫と心をゆり動かす地域素材の活用（情報の活用）。

第6分科会（小学校総合）

テーマ

「主体的に活動する子どもを作りだすための造形教育のあり方」

1. 公開授業

(1) 授業者より

①題材名 【なかよしの動物～2年工作～】

- ・子どもたちの関心を感じて、表現の意欲を高めてきた。
- ・子どもたちに課題を意識的、主体的に解決させるために、学習カードを持たせ取り組ませている。
- ・材料として色画用紙・白厚紙・ダンボール紙を用意し自由に選ばせたら、意欲を持って大きな作品を作っていた。
- ・ダンボールをはさみで切ることには抵抗があったようであるが、やりがいもあったと思う。
- ・教室が狭かったせいか作業の能率があがらず、予定していたことができなかった。

②題材名 【お話の絵 ～4年想像画～】

- ・風景画は子どもの力の差がでてくるので、想像画で仲々と表現させてみたかった。
- ・港・海岸で詩を書き、それを読み合わせ、日ごろ海について感じていることを出させ、イメージをふくらませてから下絵をかかせた。意図していた絵ができた。
- ・にじみを生かし、混色することによって変化のある情感に富んだ画面を作らせるつもりであった。
- ・本時のねらいは、もっと子どもたちにわかりやすい言葉で提示すべきであっ

た。

- ・気楽な気持ちで絵をかかせたいので、薄く淡く変化をつけながら色を塗ることに意を注いでいるが、まだ不徹底である。
- ・自分の作品や友だちの作品をじっくり見る時間を確保して、充実感を味わわせてやりたかった。

(2) 話し合い事項

①色の塗り方について

- ・白を混ぜることによって画面がくすんでしまうので、なるべく白を使わせないようにしている。
- ・雑な絵にならないようにと、境目が白いと目立ってしまうので、それらの点を注意して指導している。
- ・白を使い過ぎると鮮やかさが失われ、こなっばい絵となる面もある。だが、白を使うなどという指導はしていない。絵を見て使い方を指導することこそ重要である。
- ・白を使うと絵がきたなくなるから使わせないというのではなく、不透明絵の具において白は色を作るうえで大切な役目を持っているので、使う目的や意図をおさえて使わせる。
- ・3色以上混ぜると色はくすんでいく。その点をおさえて指導する方がよい。混色は子どもに表現の幅を伸ばしてやれる部分である。しかし、学年によって考慮することもある。

②学習カードについて

- ・表現や喜びを高めていくために学習カードを使っている。2年生としては項目が細か過ぎたかもしれない。
- ・つまずきや考え方が変わった時にもカードを見直すことによって主体的に解決する手がかりになると思う。

- ・子どもは自己評価することによって、満足感を得るという一面がある。さらに、教師の観察と学習カードを見ることによって適切な指導が可能となる。

③造形教育のねらいについて

- ・造形的な体験を通して子どもたちの意識を高め、感動を養うこと。そして、自分の座標を持って環境を認知する人間を育成することは大事である。二つの授業の中には、子どもの発達段階や調査を生かして、そのことに迫ろうという意図が見られた。
- ・他の領域や他の教科との融合をはかることによって相乗的な効果が期待できる。
- ・個々の実践活動の成果を生かし発展させていくことが大切である。

2. 提言

(1) 提言テーマ

- ・感動を他領域に結びつける手だてのある造形教育の実践。
- ・物語の絵の指導を紙芝居づくりに生かし、さらに、ビデオづくりへ発展させた例。

(2) 内容・要旨

①造形教育のねらいはどこにあるか。

- ・人間の持つ能力の中で最も優れているのは、新しいものを造り出すところにある。しかし、最近の子どもたちは既製のもので遊ぶことになれて、自分で遊びを作ることができなくなっている。
- ・「造る」という過程を通して、物に集中する力や、物を大切に作る心、美しいものを正しく認識できる確かな目、心を養うことができる。

②表現の喜びにひたる子どもを育てる実践の紹介

- ・物語の絵の指導

教師の朗読の工夫、感動して絵になる場面の決定、表現したいことが表れるかき方の工夫。

- ・興味・関心を広げて、紙芝居づくりへ。

子どもの心の高まりから紙芝居を作るということになった。挿画として価値の低いものもあったが、子どもたちが作業分担し、協力して取り組み成就した意義は大きい。

- ・紙芝居からビデオづくりへの発展。

紙芝居の鑑賞をしている中から子どもの夢は大きくふくらみビデオづくりへと発展した。放送局員の協力を得て多くの困難を克服してついに完成した。

- ・他の分野への発展、融合をはかることによって、さらに豊かな表現活動が可能になるのである。

(3) 話し合い事項

- ・子どもたちが学習の流れを作って実行していったところはすばらしい。そういう意欲をどのように醸成するかが問題だ。
- ・子どもの感動を引き出すために、詩を書かせ、友だちの詩も聞く中からイメージをふくらませたが、思いつきの羅列となり平板な絵となった。
- ・1年生の初めは好きなものを自由にかかせるが、後半はねらいを持って指導することによって、将来的につまづきやゆきづまりがなくなるのではないか。
- ・子どもは実物を見ていても、観念的に見ていることが多いのでマンガチックな絵になってしまうし、牛の絵をかくときも、前からかいたり、寝そべった姿などかけないことが多い。
- ・テーマが大き過ぎると、子どもたちはどう表現するかわからなくなる。そこで、夕方の海の様子を友だちに知らせてやろうというように、時間や対象など造形的

条件を決める必要がある。

- ・詩が即絵になるわけではない。条件を決めて子どもの意図をくみ、さらに、現実のものをよく見てこそ、イメージは広がってくるものだ。
- ・子どもに造形的操作を指導する方法の一つとして、絵の具を水に薄めることを教える場合は風船をかかせるのもよい。色を薄めることによって軽い感じがつかめられ、どこからだれが見ているかということで、お話を作ってイメージをふくらませることだってできる。混色を教える場合には、画面に大きく塗らせてみる。色の変化に驚かせ、そこから、何に見えるかを聞き子どものイメージを引き出す活動をする。そうすることによって、混ぜたら種々な色ができることを体験させるのである。
- ・教師は子どもに何を教えるか、どんなことをやらせればすんなり受け入れられるか、どんな材料が効果的かを考えて、ショートプログラムを立てて授業に臨むことが大切であるし、そんな積み重ねの中から子どもたちは自信がついてきて、主体的に活動できるようになっていくのではないだろうか。
- ・絵だけにこだわるのではなく、彫塑や版画等をつなぐ一連の活動の中で子どもたちをこのようにしたいという意図を持ってロングの指導課程を組むことも忘れてはいけない。
- ・主体的に活動する子どもに育てるためにどのような場と支えを行っていったらよいか？
子ども自身の力で見えたり、よく感じ取ることのできる対象や具体物を用い、理解しやすいめあてを設定することが必要である。

子どもが表現する対象とのかかわりを見極めたうえで何をかかせるか明確にすることも重要である。

子どもが表現しようとしていることをはっきりとらえさせるために、時間的な補償をしてやることも忘れてはいけない。最後に、総合的に見直し、考え直しをさせることも大事である。

- ・教師は、子どもにどう働きかければよいか？
子どもは何を見てどう表現したいのかをとらえることによって、次の学習をどう組織したらよいか、そして、どう指導すべきかがはっきりしてくると思う。授業の導入部分が長くて授業をつまらないものになっていることが多い。そこで、多様な表現材料や参考資料を事前に準備して、独自の表現を生み出す基盤を作ってやること。そして、最少限の指導にとどめて、子どもに表現の仕方を工夫させることが大切である。
発表の場を作って、成就感や満足感を味わわせてやることによって、次の学習への意欲を高めることにつながるし、自信を持って表現していく活動の原動力となる。

◎子どもの心をゆり動かし、主体的に活動する子どもを育てるためには、教師自ら教育の財産を積み上げて、見通しを持った指導計画のもとで、日々の授業の中で小さなステップを踏み進めていくことが大切であること。

第7分科会（中学校・高校）

- テーマ 1. 地域性を生かした造形教育
のあり方
2. 心をとらえた造形活動を

1. 公開授業

題材名 [デザイン・オホーツクの旅人]

(1) 指導者より

- ・ 赴任したばかりの学校で生徒の様子もよくわからず、その中で生徒の名前を比較的覚えている学級ということでこの学級を選んだ。
- ・ 一週間の学校生活の中で美術の美ぐらいは残るような授業を心がけている。
- ・ 現在の生徒の実態から授業としてはあれぐらいかなあと考えている。
- ・ 学級をもっていないので生徒との日常的なつながりが少なく、生徒理解が不十分である。
- ・ 日常の授業態度は静かで美しさを追求する気持ちが強い。
- ・ 流水についてはかなりの抵抗があったが、生徒からは充実した学習だったという声がある。

(2) 話し合い事項

- ・ 流水の形が何となく似かよっているし、レタリングも同じというのでは、子供もっている創造性や、自由な考えをおさえつけてしまうことにならないか。
- ・ 子供達はほとんど流水を描いたことがないし、目の前で流水をみたことがない。基本的には流水を知らないのではないか、パターン化した流水が多いが授業の後では子供達は早く流水を見たいと願っているので、そのときは表現のしかたも変わってくると思う。

- ・ 水平線のきり方や、絵具の使い方などで何らかの約束があったのか。
- ・ レタリングについてはゴシック体と言ったが基本的には制限はない。
- ・ レタリングについての子供の興味関心は、文字を書くぞ！だけでは興味を示さない他のものと合わせて作品に仕上げた方がいい。
- ・ 授業全体の流れを教師がセッティングしすぎるのではないか。
- ・ 流水のイメージは青い海に氷というよりは、真白で大きくてというほうが強いはずだ。
- ・ 授業の中では文字のならべ方に興味をもって見せてもらった。特に「の、の」の字の置き方が全体の出来を左右するようだ。町名は漢字のほうが良いと思う。
- ・ 長い時間をかけて地域素材をとりあげることは、根気を養うのに良い。
- ・ 子供たちの生の声が聞けなかったのは残念。
- ・ 地域素材を子供に与える場合は、与え方や教師のしかけが大切である。

2. 提言

提言1. 心をとらえた造形活動を（共同制作によるポスターづくりの試み）

(1) 内容・要旨

- ・ 心をとらえることができるならば創造性にみちた作品が生れるはずである。
- ・ そのためには生徒と共に悩み、考えることからはじめねばならない。
- ・ 学習に参加しない子をどうとりこんでいくかということで大型ポスターの共同制作を試みた。
- ・ 制作の際に約束したこと。・ひとりだけに責任を負わさない、・リーダーの指示に従う、・資料集め用具等は分担する、

- ・あと片づけは全員です。

◎成果として

- ・制作を進めていく過程で、本人自身にも考えつかなかったアイディアや事実が作品の中に生かされたときの喜びの反応をいろいろな場面でみることができた。
- ・他学年の生徒からも、期待する声を聞くことができた。
- ・市民にも見てもらうために展示会をひらき好評であった。

提言2 頭像制作における指導の工夫

- ・昨年の全国造形大会で彫塑の授業を行ったが、その後の実践経過をもとに指導の工夫についてまとめた。
- ・頭像をえらんだのは対象の内面にまでふみ込んで表現できると信じたからで、豊かな心を育てるためによいと考えたからである。
- ・素材としては粘土がいろいろな点で適していると思う。
- ・作品の大きさとしては実物大にできたらよいと思うが、いろいろな点でむずかしいので、特に心棒を工夫してみた。
- ・塩ビ管を利用した心棒を利用すると粘土の量が少なくて比較的大きな作品ができる。

② 話し合い事項

- ・出席者の中で頭像を扱っている学校では心棒に空かん利用の学校が多い。
- ・助言者から関連して野焼き作品の発表があった。粘土が最も素材としてはすぐれていること。子供が理解しやすいので、はにわを作っていること。大きな作品を短期間で作りあげるために心棒に一升びんを利用していること。できた作品を野焼きするために、ありあわせのものを使って、簡単な炉を作って使っていること。

6時間ぐらいかけて焼くとほとんど割れないで焼き上がる。いろいろな焼き具合のものができて癒しがあること。

- ・頭像も扱っているができるだけ大きいものをと考えていること。
- ・地域素材を与える場合は教師のしかけは大切である。
- ・心棒を工夫するとかなり大きな頭像を作ることができる。
- ・ポスターを扱うときに主題が決まったら、図柄決定までどのような道すじをたどって仕上げるのか。

- ・順序としては、

1. どんなポスターを作るのか決める。
2. どんな言葉で伝えるのか決める（コマmercialなども利用している）。
3. 言葉に合ったイラストを大まかに各自が考える。
4. 話し合いで図柄を決める。
5. くわしい図柄をかくために分担して資料集めを行う（できるだけ時間外にやるように指導した）。

- ・雑誌などにでているものの真似や、他のデザインをそのまま使うなどということはない。

3. 自己紹介と各校の実態から

- ・美術教育と生徒指導のかかわりが改めて見直された。
- ・日常的なものに無感動な生徒が多い、感動を呼びおこす教師のしかけが必要である。
- ・地域でなければできない教材の発掘が必要。
- ・彫塑の作品は大きい方が良いので、心棒の工夫が必要である。
- ・美術を通して子供を教育するのだということとを改めて考えねばならない。

記念講演〈要旨〉

「オホーツク海の流水について」

北海道大学低温科学研究所付属流水研究施設長

教授 青田 昌秋 氏

プロフィール

S38年 北海道大学卒業

S50年 理学博士学位授与

S58年～低温科学研究所施設長として就任

現在に至る。

ただ今、紹介をいただいた北大流水研の青田と申します。本当は皆様美術の関係でお集まりなので、冬だったら流水を見ていただいて、私の出番は全く必要なかったわけなんですけれど、残念ながら流水がございませんので、せっかく紋別においでになったので、流水を見る代わりに私がスライドと映画を使いまして、流水のお話をさせていただきたいと思います。

さっそく流水の話題に入らせていただきます。道筋といたしましては、世界の流水、それから流水の研究の意義、内部構造と言うことで進めたいと思います。

さっそくスライドをお願い致します。まず、地球全体の流水の状況をお見せします。

これは、南極点の上空から人工衛星で地球を見たと思って下さい。海洋の約10%が流水に覆われていますけれども、その半分以上が、南極周辺の流水です。つまり北極の流水に比べて南極の方が流水が多いと言うことであります。

次お願いします。今度は生活に馴染みのある北半球です。北極点の上から流水を見たものです。

ここで、流水の一番広い範囲と言うのは、空色で覆ってあります。それに比べて内側と言うのは、南極と同じように多半球で夏になっても解けないところです。

ここで我、オホーツク海を見てみたいと思います。ここで流水の世界的な範囲を追ってみますと、紋別の氷と言うのは、北極点より赤道に近い流水だと言うことです。つまり、オホーツク海と言うのは、世界的に一番南側の海だと言うことです。これが、オホーツク海の最大の特徴であります。どうして、こう言うことが起ったのだろうかと言うことを少し説明します。

次お願いします。これも、適当に流水の写真をもってきたわけなんですけれど、これは、私共の研究施設で、北海道沿岸に3つのレーダー局をもっています。山の高さ400Mぐらいのところにレーダーを置いています。

これは、3年ぐらい前の流水の勢力の強かった時のレーダー図です。白いところが流水ですね。で、こう言うふうには流水と言うのは渦を巻くような格好で、風と海流によって動かされながら、1月の下旬ごろから凍り始め、3月いっぱいにはこう言った氷野で覆われます。

次お願いします。さて、これを人工衛星で連続して撮っておりまして、これを季節的に追ってみたいと思います。12月の初めになりますと、オホーツク海の北の方、シベリヤ大陸の周辺が特に凍り始め、だんだんとオホーツク海の西の片寄った方向に流水はせり出していき、12月の下旬頃になると樺太の一番南側ですね、その辺りまで流水がやってきます。

この時期になりますと、紋別沖の流水も凍り始めます。よく流水はどこから来るのかと言う質問がありますけれども、来るだけでなく、紋別産の流水もあるのです。

それらが組み合わさって、オホーツク海が、白い氷原に変わっていくのです。

次お願いします。で、3月の中旬には、オホーツク海の流水は最大になります。

オホーツク海の面積と言うのは、北海道の25

倍ぐらいあります。けれども、大体オホーツク海の7~9割は毎年流水で覆われているのは間違いないと言えます。非常にこれは、地球上の一番壮大なドラマと言えらると思います。火山は確かにすごいエネルギーをもっています。しかし、非常に瞬間的ですね。それで、10年も続いたと言う話はあまりないのです。

流水と言うのは、液体が固体に変わる、それから、面積的にも莫大な地球の海洋の10%も液体から固体に、たった数ヶ月で変化することは、地球上で大も最たるものです。

次お願いします。4月上旬からだんだん気温が高くなります。太陽エネルギーを吸収して、流水自体の強度が弱くなっていきます。そして解け始め、だんだん後退していきます。

どのように後退していくかと言いますと、丁度来た時と逆になっています。

次お願いします。5月下旬から6月にかけて殆どの流水は抜けてしまって、オホーツク海も、6月の末までに全く姿を消してしまいます。

つまり、オホーツク海の流水と言うのは、多年氷ではなくて、1年氷で、こう言うことは、あまり現地の人知らない人が多かったようです。厚い氷が来ると、去年ではなかったのか。けして、そうではありません。又、北極海からの流水も入ることはございません。

それでは、なぜオホーツク海が流水の南限であるかと言うことをお話いたします。で、なぜだろうか？、私達の大先輩達も、いろいろな観測をやってまいりました。私自身もオホーツク海に船を出しまして、海洋観測をやってまいりました。

次お願いします。これは、ナンセンの採水器ですが、この採水器を使ってオホーツク海海域をくまなく調べました。深いところの水を採り、水温を調べます。採ってきた水は、どれだ

け塩分が入っているか、甘いか辛いかと言うことを検査するわけです。

海水と言うのは真水と違まして、塩分のために密度が大きいわけです。重いわけです。

普通の海洋であつたら、上に軽いのがあって、下に重いのがあつたのがあたりまえです。そう言う構造を調べるのが海洋学の基本的な仕事です。

これは、樺太の東岸の水温と塩分の分布を調べたものです。深さによって塩分は、どう変わっていくか。まず、水温を見ますと、表面はまだ真冬でないので、8℃ぐらいあります。

そして、あるところまで同じ温度ですが、50Mぐらいのところから、急に水温は冷たくなっていきます。200M以下になると、殆ど2℃ぐらいしかないのです。この辺の水は、年から年申殆ど同じです。ただ、表面の方は冬になると、だんだんと冷たくなっていきます。

一方塩分は、表面の方は32.6%ぐらいですが、オホーツク海の海水は、太平洋に比べると少し塩分が少ない。といっても、数%の差しかありませんが、塩を作るにはオホーツク海よりは、太平洋の方がよいのは確かです。

つまり、1kgの中には33gしか塩が入っていない。表面はそうなんですけれど、50Mぐらいになると、急に塩分が濃くなっているわけですね。塩を作るのなら深い方がよいと言うわけです。水温と塩分から計算しますと、温度に於ける密度が出てきます。表面から50Mぐらいまでは非常に軽い。ところが、それを境にして急激に重くなると言うことがわかってきたわけです。

海水は冬になると、だんだん表面から熱を奪われ、下は地熱がありますから、海は表面から北風によって熱を奪われているのです。

そして、水温がどんどんどんどん北側にいくわけですね。真冬になると0℃になってしまう

のです。で、池の水は表面から冷えていって、 0°C になりますと氷が張ってしまうのです。そして、下の方には 4°C の水が残っている時期が絶対あります。つまり、真水は 4°C が一番重い。

0°C は、それよりも軽いと言うことです。

ところが、 0°C で水は凍る。これは、 0°C の定義は真水が凍る温度を 0°C としたわけですから当然ですね。だから池の水は、表面から凍り始め、下には金魚が泳いでいても、いいわけです。それで凍り始まって、どんどん全体が厚くなっていくことを示します。

海水はこれと違います。結論をいいますと、海水は、温度が低ければ低いほど重くなります。低いほど重いわけです。冷えたら表面から熱が奪われます。冷える。重くなる。下と上が入れ替わる。つまり、対流を起こしているわけですね。冷たくなれば、どんどん対流が進んでいくんですね。ところが、塩分が濃くなると重い。塩分が濃くて多くなると、いくら水温が低くなくても、これ以上は下には対流を起こさせないよと、塩分が頑張ってくれるんです。

つまり、オホーツク海と言うのは、50Mのところ、対流が終ってしまうので、これまでが凍る温度になっている。凍る温度と言うのは、塩分のために真水よりちょっと低いのですけれど、 1.8°C です。

次お願いします。海水が凍ると言うけれど、塩分は凍っていないわけですね。真水が凍っているわけです。丁度缶ジュースを冷蔵庫に入れておきますと、おそろしく濃いコンクジュースを飲むことができます。あれはジュースが凍ったんじゃなくて、ジュースの中に含まれている真水が凍ったわけです。だから残りの分が排出されて、濃いジュースを飲むことになるのです。海もそうです。凍っているのは、真水の部分が凍っているわけですね。氷は薄いわけですから、

それでああ言う結晶が、これは非常に軽いわけですね。海水に比べたらはるかに軽い。と言うことで、表面に浮び上がる。そして、先ほどの1枚1枚と言うのが組み合わさりまして、とろりとろりとした海の状況をつくるわけです。

次お願いします。この時期には、また、うねりがあります。風も吹きます。そうすると、全く一面が静かな海だと、表面が凍ってしまいます。ところが、うねりが入ってきますので、うねりが入ってくると、山と山、谷と谷のところで折れてしまうのです。そして、折れて最初は三角形みたいな格好をしています。ガチャガチャぶつかるために、ぶつかったところが、もり上がってしまうのです。丁度、はすの葉のようなので、はす葉水とよんでいます。大体大きさは、均一なんですね。これは、この時期にどう言ううねりが入ってきたかと言うことを示していますので、この海の状況が推察されるのです。ところが、ここにせっかくすき間ができましたが、またこれが凍ってしまいます。

次お願いします。あのすき間が凍ってしまって、大きな一枚板になるわけですね。何kmと言うのもありますし、また、うねりが入ってくると割れるわけです。これは厚さ15cmぐらいの水ですけれども、一面凍ってしまいます。

ところが、こちらから風が吹いてきます。うねりが、こちらからやってきます。どうなるでしょう。こちらからうねりがやってくるわけですから、これは、上下、上下と言う形になります。これを、いかに氷とよんでいます。で、オホーツク海の水は、どのぐらい厚くなりますかと言う話がよくありますけれど、こう言う現象がなければ、オホーツク海の流水と言うのは、南側で約40~50cmぐらいしかならないわけです。

ところが、こう言う現象のために、一挙に2倍になってしまうのです。だから、重なり合

ったり、ぶつかり合ったりするところでは、勿論何mの水山みたいなものができるのです。

次お願いします。これも、40~50cmぐらいの水なんです。ちょっとした風によって、「ピー」と亀裂が入ってしまいます。一挙に離れてしまうこともあって、時々戻れなくなるわけなんです。一昨年水に乗ったまま流されました。

観測の場としては、非常に危険なところですよ。

もう一つは、水に穴を開けて潜るわけですよ。一人で潜って楽しんでいる内に戻れなくなり、えらく苦労しました。もうだめと思ったのですが、よく考えてみると、自分の吐いた気泡が天井にくっついているんですね。気泡の多いところに戻って、ようやく脱出したことがありました。で、流水と言うのは、学問的に大きな貢献をしたと言うことです。

一つは、ウェゲナーと言う、私共には神様なんですけれども、ウェゲナーという方は1800年の終り頃からグリーンランドで、気象観測とか海の観測をやった人なんです。彼は、グリーンランドで氷がぶつかり合うのを見たんですね。その時の彼の頭にひらめいたのは、多分、地球もこのようなものだろうという、一つの発想が浮んだそうなんです。つまり、巨大なものですね。こう言う目の前全体ぐらいの空間領域を使って、大きくもり上がって山ができると言うのは、丁度地球の歴史を表しているのではないかと言う発想が湧いたということです。彼が1900年に入って、学問的に体系づけたのが、大陸移動説ですね。現在の地震予知と言うものも、基本的には、彼の大陸移動説、プレートテクトニクスと言う正に流水の現象からの発想であったわけです。もう一つは、ナンセンと言う人ですが、彼も1800年の末頃に北極探険に乗り出したんですね。北極海を4年間、船で漂流しています。命からがら戻ってきたわけなんですけれど、

彼は4年間、自分の船の位置を星で観測したのです。そして、1時間ごとの風のデータを綿密にとり続けました。彼は戻ってから、位置と風との関係を研究しました。彼が気付いたことは、氷は風下の方に流れるんだと考えていたわけなんです。地図上に記入してみると、風下より右へ右へと動いていることがわかったんですね。つまり、地球の回転が作用することが、初めて明らかになったのです。現在も、海流運動、海流のそもそもの基本的なエネルギーは、風である。現在も変わりありません。このように、二つの大きな学問体系、現在生きている学問体系のスタートにあったと言うことです。

次お願いします。ここで、流水の危険性について、つけ加えておきます。流水の厚さの増加は、流水が厚くなればなるほど、のびにくい性質があります。流水は、ずっと厚くなるんじゃない。だんだん横ばいになって、寒さのルートに比例して厚くなります。ですから、流水はそう簡単に厚くはならない。流水の強度は、塩分とか気泡が含まれていると非常に弱いと言うことです。

次お願いします。これは、流水の最盛期ですね。一つの厚さと言うのは、40~50cmぐらいが、幾つも重なって氷の山をつくる。これを「リッチ」氷脈と言います。

次お願いします。色がついております。色は皆様ご専門なので、よく聞かれますが、流水はどうして青いのか？色の問題は複雑で、観測しなければなりませんけれども、個々の氷をよく観察しなければ一概に言えません。ただ、太陽光線が表面では散乱してしまいます。

こう言う部分は、白く見えるわけですが、結晶体を通った時には吸収されます。

透過、反射、吸収の三つが、かみ合って青い色が残りやすいということは言えますが、なぜ

青くなるかは、個々の条件を考えなければ一概には言えないと思います。

次お願いします。これはアイスフラワーと言う現象です。水の下はマイナス1.8℃あります。

流水と言うのは、真水と違ってすけすけなんです。結構穴が開いています。下は暖かく上は冷たい。そこに暖かい水蒸気が通って上がってくるわけなんです。そして、外気に触れたとたんに固体になる氷化現象が起きます。

そして、このような花畑みたいな現象になる。これが、アイスフラワーと言います。

次お願いします。流水をただ美として、観光的美しさを味わうのなら、この時期（4月）真白な流水に青い黒い感じの水面が出て、コントラストが一番いいのがこの時期です。

次お願いします。次に南極の水について、二三説明しましょう。これは南極の棚氷です。

これは大陸から海に向かって雪を押し出しているのです。テーブル型の氷山が浮いている。

よく南極はテーブル型で、北極は尖っていると言われますが、本質的には何も変わらない。

ただ南極周辺がなだらかな斜面になっていて平野という状態で張り出すので、テーブル型の流水ができるのです。

次お願いします。ここで、流水研究の意義について考えてみましょう。流水ができるのは、南極周辺と北極周辺です。先ほどの写真のように光を反射しています。北極も南極も太陽高度が非常に低いわけです。そして、南極は非常に冷たい。ところが、赤道の中心と言うのは、太陽エネルギーをがんがんに吸収して、海洋の温度は上がります。暖かいところは軽くなって上昇します。そして、両極に分かれていきます。つまり流水と言うのは、大気を動かすベルトコンベアーの一翼を担っていると言うことです。

大気の大循環を支配する役割は流水であり、

そのことが長期の気象予報や生物などに関わってくるので重要です。

もう一つは先ほど冷蔵庫に入れたジュースは濃くなってしまいますと言う話をしました。

ジュースのコンクジュースは、どこにいけばいいのかと言うと、上に逃げるわけにはいかなから、下に落ちていく。つまり、流水ができる場所は、濃いジュースつまり、塩分の濃い重いのが下に落ちる。そこで海洋の大循環が生じる。で、大気の大循環と組み合わせると、世界の気候を支配することで、流水の第一の意義はここにあります。

次お願いします。次は、流水と生物学的な研究についてお話しします。これは、紋別沖の水です。黒くなって見えるのは、植物性プランクトンです。つまり、植物性プランクトンの棲かとして条件がよさそうと言うのが、研究の段階です。植物性プランクトンですから、光が必要なんです。ところが、光を嫌うプランクトンもあるのです。また、水温マイナス1.8℃ぐらいが安定して保たれている。それから、冷たい水というのは気泡を含みやすい。つまり、酸素を非常に含む条件などが考えられます。

北の海のプランクトンの量は南と比較すると、6倍あります。北の海は、海の資源の宝庫であるという理由は流水にあるのではないかと考えることができます。植物性プランクトンが増えると、それを食べる動物性プランクトンが増える。そこに、魚が集まってくる。そうして豊かな漁場になるということです。これまでは、流水の静的な部分について、お話ししてまいりましたが、ここで動きのある流水を見ていただきます。質問がありましたら、後ほどお受けします。映画をお願いします。

大 会 役 員

| | | |
|---------|-----------------------|-----------------------|
| 大会委員長 | 松 島 照 男 | 北海道造形教育連盟委員長 |
| 大会副委員長 | 菅 原 隆 治 | 北海道造形教育連盟顧問 |
| “ | 菅吉 原田 隆義 | 北海道造形教育連盟顧問 |
| “ | 早 弓 弘 吉 | 北海道造形教育連盟副委員長 |
| “ | 寺 本 山 修 吉 | 北海道造形教育連盟副委員長 |
| “ | 秋 佐 藤 吉 五 郎 | 北海道造形教育連盟副委員長 |
| 大会顧問 | 小 松 厚 | オホーツク造形教育連盟顧問 |
| “ | 川 村 正 男 | オホーツク造形教育連盟顧問 |
| “ | 鷺 見 憲 之 治 助 | オホーツク造形教育連盟顧問 |
| “ | 近 江 幸 之 助 | オホーツク造形教育連盟顧問 |
| 大会理事 | 佐々木 理 温 衛 | 北海道造形教育連盟事務局長 |
| “ | 島 木 村 木 典 淑 | 紋別市立紋別幼稚園長 |
| “ | 鈴 橋 部 口 山 吉 川 美 | 紋別市立大谷幼稚園長 |
| “ | 橋 渡 野 高 住 長 久 | 雄武町立立紋中學校長 |
| “ | 須 谷 須 美 康 進 | 紋別市立中渚滑小學校長 |
| “ | 久 美 康 進 | 紋別市立中渚滑小學校長 |
| 大会運営委員長 | 豊 島 豊 | オホーツク造形教育連盟委員長 |
| “ 副委員長 | 今 井 龍 男 | オホーツク造形教育連盟副委員長 |
| “ | 横 田 勇 吉 輔 | オホーツク造形教育連盟副委員長 |
| “ | 黒 河 洋 | オホーツク造形教育連盟副委員長 |
| 大会総務部長 | 高 橋 忠 昭 | オホーツク造形教育連盟事務局長 |
| “ 総務 | 森 橋 忠 懸 | 道 幌 町 立 社 名 湖 小 学 校 |
| “ | 龜 浦 忠 懸 | 小 清 水 町 立 中 斗 美 小 学 校 |
| “ | 山 石 浦 宮 橋 一 郎 | 女 小 清 水 町 立 旭 野 小 学 校 |
| 大会事務局長 | 狩 野 鉄 男 | 紋 別 市 立 紋 別 小 学 校 |
| “ 次長 | 池 田 野 田 義 宏 | 紋 別 市 立 紋 別 小 学 校 |
| “ | 小 野 寺 須 野 須 吉 貝 喜 久 晴 | 紋 別 市 立 紋 別 小 学 校 |
| “ | 須 野 須 吉 貝 喜 久 晴 | 紋 別 市 立 紋 別 小 学 校 |
| 大会々計部長 | 猪 谷 憲 博 | 流 上 町 立 流 上 小 学 校 |

紋別小学校PTA協力役員

PTA会長 石 尚 恵 雄

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|--------------------|-------------------|---------------------|-------------------|--------------------|--------------------|-------------------------|-------------|----------------|-------------|-----------|---------------|
| 事業係 | 佐大田鈴早宮青松遠岩佐原北西石小嶋中 | 野滝上木川下木原藤間藤田川村川寺嶋 | 法鵬ひろ文佐伸孝ヒ美敏由京美喜琴茂節恵 | 充子恵知子人サ津子雄博京喜恵美子恵 | 寿米菅石小鈴上富高衣佐本河楠松吉石伊 | 見田原田野木野際橋原藤多村木田川原藤 | 利子祐優美貞政恵由美津初恵暢昭植幸みどり百合久 | 大島黒渡沢中佐吉長鈴 | 百合子文ゆり子二志利美恵歳礼 | 加藤柴竹熊森大佐丸斎石 | 藤岡田井石藤尾藤川 | 進敏順麗茂由美三和紀美節千 |
| 会場係 | 鏡伊鈴田曾宮久加渡井鈴長 | 藤木村我腰保藤部上木尾 | 恵り子静多綾安花裕順光勝 | 一子子恵子伊子子子雄 | 福木菊井佐小北洪梅寺中 | 士村野上藤川郷谷田門西 | 幸とめ邦法八澄修恵喜ミナ貴 | 大勝谷黒渡沢中佐吉長鈴 | 鳥山川辺村張藤野井木 | 加藤柴竹熊森大佐丸斎石 | 藤岡田井石藤尾藤川 | 進敏順麗茂由美三和紀美節千 |
| 編集係 | 勝加鈴柿宮佐 | 山藤木嶋沢藤 | 小勝多恵子俊美 | 郎恵子子枝智 | 新田棧斎寺兜兎岩 | 田真良真利玉倉 | 清知子子利啓ひ | 森西勝真佐 | 光敏美代子明文 | 宮坂林大岩 | 川本屋松 | 治牧裕美襟 |

編 集 後 記

第37回全道造形研究大会は関係者各位のご協力により遠隔の地紋別市において多大な成果をおかめ無事終了させていただく事ができました。研究の計画から研究実践・研究集録の作成等、オホーツク造形教育連盟の会員が主管致しましたが、何分にも不慣れのため種々ご迷惑をおかけしたと存じ、衷心よりお詫び申し上げます。

全道各地からお集まりの皆さんの、研究成果のご報告・質の高い活発な討論等が私どもにとっての大きな収穫となり、今後の活動の指針となるものと信じます。

さて、本年度の研究集録が出来上がりました。大会終了後ただちに原稿をお寄せくださいました記録の先生方のご労苦はもとより、

ご協力・ご支援を賜りました方々の過分なご厚志に対して、ご満足のいただけるような編集は出来ませんでした。担当者一同心から感謝申し上げている次第でございます。是非ご一読の上、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶にかえさせていただきます。

第37回 全道造形教育研究大会・紋別大会 大会集録 編集委員一覧

| | |
|---------|----------|
| 黒 河 洋 輔 | 湧別町立上芭露小 |
| 西 原 進 | 佐呂間町立知来小 |
| 高 橋 忠 昭 | 紋別市立中渚滑小 |
| 狩 野 鉄 男 | 紋別市立紋別小 |
| 池 田 義 雄 | 〃 |
| 酒 井 貞 夫 | 〃 |

第37回 全道造形教育研究大会紋別大会

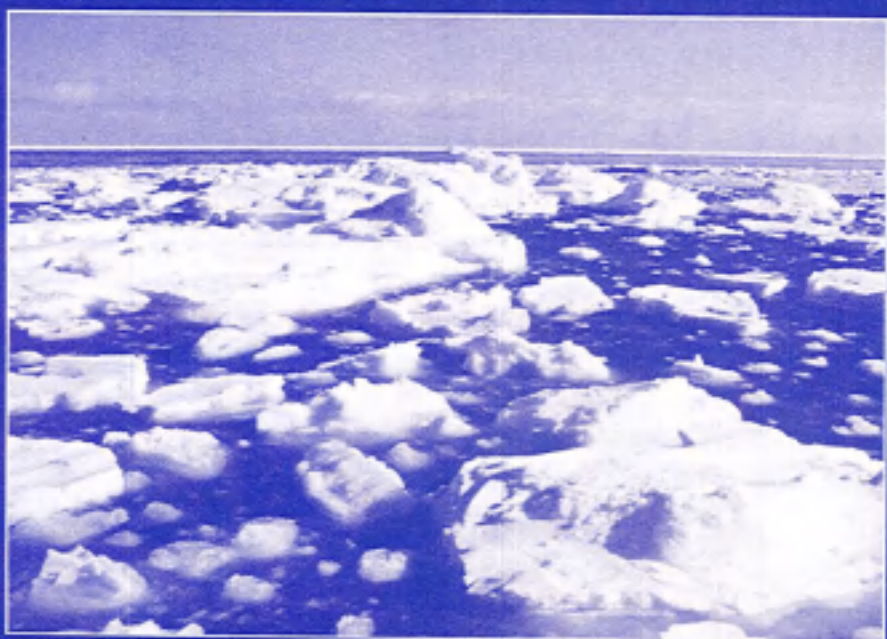
大 会 集 録

昭和62年10月24日 発行

発 行 第37回全道造形教育研究大会
紋別大会運営委員長 豊島 豊
オホーツク造形教育連盟委員長
編 集 大会集録編集委員会(紋別市立紋別小学校)
印 刷 横田印刷株式会社

紋別市本町4丁目

電話(01582)4-3369



主 催 北海道造形教育連盟